

観光立国を支える人材育成

～せとうち観光専門職短期大学の青木学長と観光教育について対談～

2021年4月に開学した「せとうち観光専門職短期大学」の青木義英学長をお迎えし、同じく2021年11月に50周年を迎える一般社団法人全日本ホテル連盟の清水嗣能会長と、日本の観光について対談を実施いたしました。



青木 義英

せとうち観光専門職短期大学
学長

【テーマ① 開学】

「観光」というキーワードの学校は多々ありますが、その中で開学に至った背景や、開学に込めた想いをお聞かせください。

青木 私が大学新設構想を伺ったのは2017年5月のことです。理事長の穴吹忠嗣氏から「高松に来てほしい」「産業界のニーズとして、卒業して観光分野で役に立つ人材を輩出する大学を作りたい」と声掛けいただきました。私自身は大学の観光学部で教壇に立っていましたので、非常に興味があるオファーでした。

私の経験では、「観光系大学の卒業生のうち観光産業に就職する人は約23%であり、かつそのうち約半数は5年程度で転職している」ということが現実であり、観光分野で活躍できる観光エキスパートを養成する大学の必要性を感じており、設立に向けて理事長とともに進めることを決意しました。

清水 今の青木さんのお話の中で示された「結果約10%弱の人しか残っていない」ということは、観光産業の数ある受け入れ先としても、その問題の根本は突き詰めないといけないですね。

青木 そんな現状を改めて共有し、「実際の社会に出て長く役に立つ人材の輩出する学校であればぜひ！」となった次第です。また「やりがい」という意味においては、一口に「観光」と言っても、学際的には非常に広範囲にわたることであり、そのプロフェッショナルを輩出するということは、国の観光戦略=国家プロジェクトにもつながると思いました。

清水 国家プロジェクトを担う！まさにそのとおりですね。宿泊業界には大きく4つの団体があり、コロナ以前はインバウンド需要もあり、大変な人材不足という状況でした。

コロナによってその状況は一変しましたが、今後、必ず盛り上がる信じて、志を持っている若い人材を業界を挙げて応援してかなければなりませんね。

青木 卒業後、一つの歯車ではなく、トップの思っていること、業界が抱えている課題を大きな視野でとらえることできる人材を育てていきたいと思っています。

【テーマ② 理念】

学校には4つの教育理念。連盟には新たに定められた理念(Mission, Vision, Value)。「理念」について思うところをお聞かせください。

青木 まず前段で話したほうが良いかなと思うところがあります。

現在、世の中にはたくさんの大学・教育機関で「観光」分野の教育を展開していますが、そこで教鞭をとっている教員側に、観光分野全体を通してコーディネートできる人材がないということです。あまりにも学際的であり、経営学や統計学、まちづくりと、それぞれの分野のプロフェッショナルはそろっているのですが、それらを全部束ねられるような人材が実はいない。ましてや、「その教員が実際の観光分野の現場で、いかにお客様と対応しているかなんてことはみんなわからない」というのが現状ではないかと思っています。この現状を打破し、新しい学校像が理念に込められていると考えています。

また冒頭お話ししたとおり、業界就職率が非常に低い現状を踏まえ、産業界との連携をしっかりとすることも必要と考えています。同じく、地域との連携も重要と考えています。

清水 私どもの業界が求めているのは、上司やお客様の言うことをただ聞くのではなく、自発的に創意工夫を凝らせる人材です。

かつて私どものホテルで、雪の降る日に難病を患ったお客様連れのご家族の予約をいただいたときのことです。私どもの従業員はその子を喜ばせるため、自分たちに何ができるかを考え、ディズニー映画『アナと雪の女王』のオラフや雪だるまを中庭を作りました。ご家族にはとても喜んでいただき、後日、写真の入った感謝のおハガキをいただきました。

1カ月ほどしてから、またハガキが届きました。

全日本ホテル連盟会長

清水嗣能



「その節は大変お世話になりました。ダイは皆様からいただいた楽しい思い出を胸に、天国に旅立って行きました……」

愕然とし、涙を流す従業員もいました。そのとき私はその従業員たちに言いました。「私たちホテリエはダイ君の病気を治すことはできないけれども、いい思い出づくりのお手伝いをすることはできたと思う。いい思い出が多ければ多いほど人は幸せなのだから」

【テーマ③ 入学の学生の声】……………

現在コロナ禍という中で観光産業は非常に厳しいと思いますが、その中で学生の生の声をお聞かせください。

青木 本学が文科省より認可いただいたのが2020年10月23日でした。一般的な入試（推薦入学等）のスケジュールから逆算しますと、学生が進路を検討する時期から一步遅れているということが現実でした。当時、文科省からは当然ですが、認可前に募集活動は不可と言われていたことから、非常に悩んだことを覚えています。

ただ結果的には、そのような状況下で入学を希望してきた

学生こそ「本当の意味で観光産業に携わりたい」という強い決意を抱いた学生と思い受け入れております。

観光には3つの要素があると考えています。「安全性」「経済性」「快適性」です。現在はまさにコロナ禍ということで、その一つである「安全性」そのものの根底が崩れたわけですが、リスクマネジメントの実事例として授業でも取り上げています。

学生は必ずコロナが明ける日が来ると信じて、その際にはコロナにも負けない観光産業を担うという目標を持って頑張っています。

清水 ホテル経営者としては、観光産業で長く従事する若い人材が、ある意味、「即戦力＝プロフェッショナル」な知見を有して活躍することは非常にありがたいお話を。

また業界団体としてみても、「観光立国日本」という標榜を掲げていることから、国の柱になることは間違いないことと思っています。つまり、観光産業に従事することは国を支える一端を担う誇りに持てる業界と思っております。

学生の皆様には、一時的にコロナで厳しいということはありますか、必ず明ける日が来るので、その時に活躍できるよう、強い情熱を持って今は勉学に励んでほしいと思います。

